

中田ヶ原練兵場今は昔 —軍国主義の温床から民主教育の殿堂へ—

旧職員 石川 満祐

◆第13師団の入城と練兵場づくり

当時の旧城下町がどこでもそうであったように、高田も町の発展策として軍隊の誘致運動を積極的に行った。明治20年代後半からの運動は40年代になってようやく実り、高田町と高城村とが合併して新高田町が誕生したその日（明治41年11月1日）、第13師団の歩兵第26旅団司令部が入城したが、これに先立ち金谷村中田ヶ原の美田約50町歩（内、畑は1町歩）がつぶされることとなった。

この地は呼称の如く殆ど金谷村中田部落、一部は京田、向橋、灰塚の農家の所有であった。歩兵連隊地、今の南新町アパート、城西中学校敷地から近接していること、金谷山麓に整備予定の射撃場と隣接させ、一組で演習場が作れるという理由であろう、市当局によって買収された。初め、坪64銭であった。これは当時の売買相場の2倍半に比べて地価の4倍であった。数年内で第二次三次と買収が行われて坪1円の高値になった。耕作地を失った地主達は町当局の斡旋で、24、5人が郵便配達や電話工夫に雇われた。

練兵場づくりは、水田には大小の玉石を敷きつめ、その上に土砂を盛り固めた。土盛りは灰塚射撃場を造成する時、金谷山に続く山をかき崩した土砂を運搬した。この土木工事は主として能生の高島順作が請負った。

◆練兵場の外郭

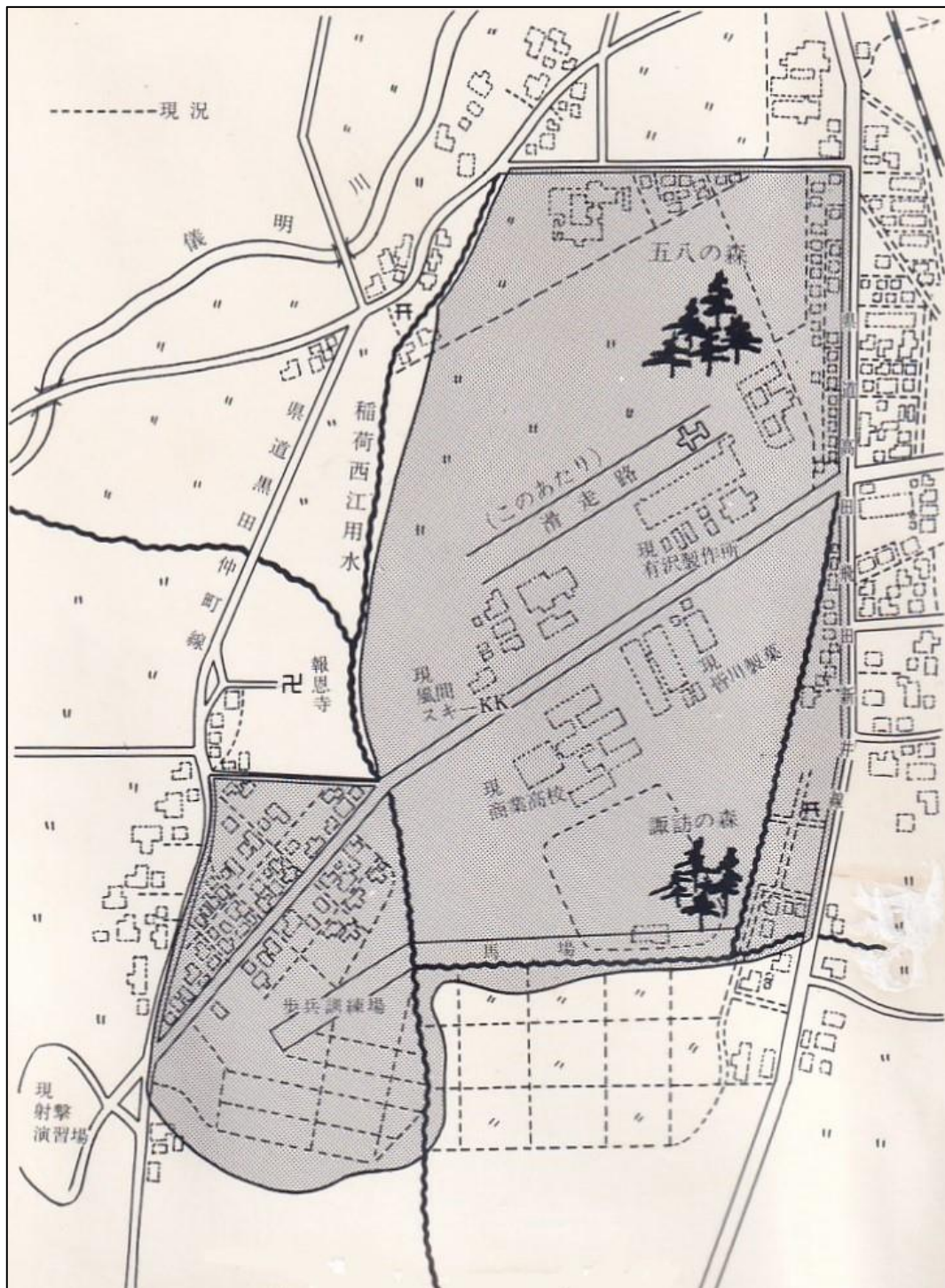
面積15万坪のこの広大な練兵場の外郭は次の通り。東は斐太線道路沿いの西側用水、西は西山線道路（一部灰塚射撃場入口付近まで）現産業道路付近からは西中江用水（稻荷西江用水）、南は本校合宿所裏の高田新田用水、北は養護学校前からホシノ工業(株)を南側に抜ける用水であり、南北約1,100、東西約900メートル、周囲約4,000メートル（但し拡張前）あった。

◆練兵場内部点検

四隅には高さ30センチ位の石柱が埋められていた模様であるが、周囲は用水に囲まれていた。練兵場へは用水を渡ればどこからでも入れたが、一応正式な入口は寺町通りの突当りにあった。今の学校前の産業道路は練兵場や灰塚射撃場へ訓練を受けに兵隊や学生がよく通った小道であった。広い場内には北東寄りの「五八(ごはち)の森」と南東端の「諏訪の森」とがあり、暫し憩った安らぎの森でもあった。そして現在の合宿所東側から南端用水に沿っ

て、幅10数メートルにわたり騎兵隊の、そしてこの延長線上西端の用水から200メートル位の長さの歩兵訓練場があった。

馬場の両側には1メートル余の土手が築かれてあり、その中で東から馬が跳越えられるような、巾1.5メートルの溝と高さ1メートル余、奥行き1.5メートル位の竹や樹木の枝の障害物があった。又歩兵訓練場は、東の方から順に、土盛りして小高くなっている所を越え、玉石の垣（高さ1.5メートル余、奥行1メートル余）を跳越え、次に巾6メートル、深さ4メートル位にかけてある丸太棒を渡り、最後に、深さ4メートル位に掘られた溝に駈降り、そこから急傾斜の壁一間知(けんち)石が積まれている一をよじ登り、そうこうして一通りの訓練コースが消化されることになる、というものであった。



中田ヶ原略図（現地図作成 松村月子・三上さとみ）

◆師団の離高と30連隊・山砲隊の移駐

中田ヶ原練兵場は、第13師団入城により軍都を自負するようになった高田と共に歩むことになった。殆ど毎日各隊はここに来て訓練を受けた。大正14年に、戦後の不況、軍費削減の風潮の中にあつて第13師団廃止（歩兵第58連隊、騎兵第17連隊、野砲兵第19連隊、輜重兵（しちょうへい）第13大隊）を余儀なくされたが、熱心な存置運動が功を奏し廃止に引続き歩兵第30連隊、山砲兵第1連隊が移駐してきた。規模が縮小されたので、練兵場も以前のような賑やかさは見られなくなったのであろうが、その代り中等学校で軍事教練が実施される（大正14年から）ようになって、更に又満州事変・支那事変・大東亜戦争と戦況が緊迫するに伴い、練兵場は大いにその存在価値が高まり、戦線に立つ幾多の兵士・精強部隊を養成した。

◆練兵場の主な行事

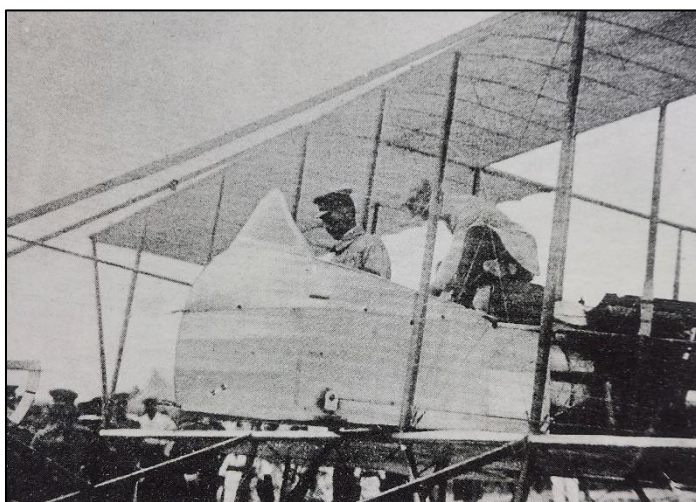
こうして中田ヶ原は大東亜戦争終結まで名実共に練兵場としてその使命を発揮するのであるが、ここで行われた兵隊訓練以外の主な行事は次のようなものがあった。

1月8日の陸軍始（りくぐんはじめ）と天長節の観兵式そしてこの時の大演習、3月10日の陸軍記念日の奉天戦に因んだ演習。そしてこれには、中等学校で軍事教練が取り入れられてから市内中等学校生徒、さらには青年学校生徒も参加するようになった。昭和2年5月偕行社裏に忠魂碑ができるまでは、毎年4月19日に行われる招魂祭は、ここ練兵場に祭壇が設けられて執行された。大規模演習になると数千人から万余にもものぼった。こういう場合南北両軍に分れ早朝中田原頭で勇壮なる白兵戦が展開されるように、1、2里隔った地点から行動が開始されるのが常だった。閲兵官は連隊長とか県知事とかであった。市内各中学校の軍事教練がここでも実施されたことは言うまでもない。

◆しらとえのすけ白戸栄之助の初の飛来

中田ヶ原練兵場に飛行機が初めてやって来たのは大正2年である。日本でただ一人の民間飛行家白戸栄之助が、鳳（おとり）号という木の骨に布を張った複葉機を操縦して飛んで来た。我国最初の飛行から3年足らずで早くも市民にお目見えした、県下初の飛行でもあった。

8月27日には試験飛行を行い、9月13日には高度100メートルで場内を3周、14日には250メートルで場内を8周した。プロペラの爆音に度肝を抜かれた群衆は熱狂し着陸すると機体の周囲に歓声をあげて殺到した。この飛行機大会は、高田開府300年祭の諸行事の一環として計画されたものであり、最も人気が高かった。この一週間の高田駅の降車人員約3万3千人、市内宿泊者は約3万4千人であり、市に落とされた金は10万円余と推定されている。



◆スミスの曲芸飛行

その後大正4年には所沢航空隊の佐藤大尉が飛来し、大正6年7月には米国の曲芸飛行家アート・スミスが興行師につれられてきた。興行なので機体を自由に見せぬよう板や筵で囲って金谷山まで縄を張りめぐらして30銭か40銭の入場料を取った。

急上昇、やがて2,000メートルの上空から黄煙を引きながら、横転、逆転、宙返り、木の葉落し、キルク抜き、アーチくぐり、地上接吻飛行、観客の頭上すれすれの低空飛行という、風に蝶の舞うような自在な曲芸を演じ観客を満足させた。着陸して彼の母親からキスを受けたことも見慣れぬ観客に異様な感銘を与えたようである。スミスは豆自動車で場内を一周して挨拶した。

その後軍用機は時々飛来したが、昭和6年5月の連合演習には飛行機も参加している。



絵・岩銅健治

◆愛国機命名式

飛行機ということで記録に留めらるべきことは、昭和7年10月の五八の森の東側の広場で、神式を以て荘厳に挙行された愛国機命名式であろう。この時軍部から荒木陸相代理大谷少将を初め、在高各部隊、県・地元の諸官庁幹部、一般群衆それに市内小中校生や在郷軍人等で広い練兵場も溢れるばかりの盛況であった。命名書は次の通り



愛国52(新潟縣)号

茲に愛国の熱誠を以て新潟県民より献納せられたる飛行機九一式戦闘機を愛国第52(新潟縣)、新潟消防組及び学生生徒より献納せられたる飛行機九二式偵察機を愛国第56(新潟消防)同57(新潟学生)と命名す。

昭和7年10月20日 陸軍大臣 荒木貞夫

式典後他の一機を加えて4機は感謝の旅へと飛び立った。万余の群衆の万雷の万歳に送られつつ、一機毎に低空飛行や宙返り・木の葉落しの高等飛行を演じ、高田市上空を旋回した後、所定の県下訪問コースにより目的地へと向かった。県民挙つての総動員の愛国機新潟号ということで県下各地から見物人が集まるため、列車の増結運転が配慮された程であった。



s7. 10. 20 高田市中田ヶ原練兵場

高田市献納記念式(左から愛国51(新潟縣)、愛国52(新潟縣)、愛国56(新潟消防)、愛国57(新潟学生))

◆飛行場化計画

練兵場を飛行場にするという計画（信越北陸飛行場と称す）は、古く昭和2年に陸軍省で持っていたが、この時は実現されなかった。我国3大演習場の一たる関山演習場が近くにあるため飛行場の設置が必要だったのである。

戦時中本格的飛行場にするため昭和17年南西方に拡張され、富山県呉羽飛行場の管理となったが、この時も飛行場建設は実現されなかった。従って最後まで滑走路は舗装されなかったが、平坦地—ただ20～30センチの雑草が生えていた。尚今の合宿所あたりは一面の茅と蓮の藪であった—であるから楽に離着陸できた。

◆公認競馬場以上に人気を博した高田草競馬

練兵場で草競馬が興行された時もある。昭和3年6月の競馬は大変な人気であった。主催は中頸城郡・高田市畜産組合であった。出場馬は遠く東京・埼玉・長野から、県内は三条・新発田方面より夫々貸切列車で入場し、地元一市三郡から40頭も申込みがあり、係員も先進地の三条・新潟競馬場より70名も雇入れ、見物人は3万人近く、大入り満員であった。

第一日目はエキシビジョンとして軍隊の馬術があったが、公認競馬とは異なり勝馬投票は行われず、その代わり余興券を発行して妙味あるひいき馬の番号を用紙に書かせて福引を出す魅力あるものであった。荷馬車競争も草競馬ならではの番組であった。コースは杭をうち縄を張って設定したものである。飛行機の時と同じように興行であるからただ見を避けるため板や筵(むしろ)、薦(こも)でなかの様子を見えないようにした。400坪の栈敷を設け、特等1円、一等60銭、立見25銭、軍人・学生15銭、小人10銭の入場料を取った。馬を出した村の応援隊も繰出して大賑わいであった。両日の番組は次の通り。

(第1日目)

第1回	速走競争	1,000メートル
第2回	駈歩	同
第3回	同	同
第4回	同	同
第5回	速走競争	同
第6回	速走(荷馬車)競争	600
第7回	駈走競争	1,000
第8回	同	同
第9回	同	1,600
第10回	県内産馬競争	同
番外	軍隊馬術	

(第2日目)

第1回	駈走競争	1,000メートル
第2回	同	同
第3回	同	同
第4回	速走競争	1,600メートル
第5回	駈走同	1,000メートル
第6回	同	1,600メートル
第7回	速歩優勝競争	同
第8回	丙駈歩優勝	同
第9回	乙同	同
第10回	甲同	同

昭和4年7月には第2回競馬大会が開かれた。前年同様大変な人気で主催者からは賞金約1,500円余が授与された。前年は1回に4頭立の貧弱さだったが、この年は1回に10頭飛び出せるコースであり、鮮やかな手綱さばきの女性騎手に人気沸いた。

◆配属制10周年記念軍学連合大演習

今、連合演習中最大規模を誇ると思われるものに、昭和10年9月26、7日の中等校配属制10周年記念一市八郡連合大演習がある。今当時の新聞報道に従って、両日の演習模様の概要を多少漢語を交えながら述べてみると、26日夕6時煙火合図に猛雨について練兵場を中心に市一帯に亘って両軍の斥候の偵察に依って交戦の火蓋は切って下された。南軍伊従支隊長は後10時敵陣を壊滅奪取せんと全軍に襲撃命令を下し、ここに猛烈な攻撃が開始され、北軍必死の防御に努めたが逆睹し難い不利な戦況に陥った。北軍中川支隊は練兵場南北端に、対陣せる両軍は延長2,000メートルの幅員に戦線を張って互いに偵察斥候を出して敵状の搜索を続け鋭意作戦工作を練っていたが、猛雨と暗夜を利用して市最北端2,000メートルの地点まで退去、全軍を集結して防戦死守したので、さすがの南軍支隊も撃滅し難く、翌払暁をまって追撃する事に決し、蟻も通らぬ前哨戦を張って夜を徹した。

雨のあがった翌朝、待機の姿勢をとりつつ無気味な数時間を経過した両軍は、出動中の斥候から夫々敵状報告を受けるや、両支隊は俄然緊張し前4時頃徐々に戦闘態形に移る。やがて斥候の衝突から深夜の静寂を破って、ここかしこに銃声が聞こえ、戦況有利に逆転させた北軍支隊は一挙に南軍を練兵場北端地区にて、潰滅せんと追撃行動に変わり猛烈な逆襲を開始し練兵場を中心に一大衝突し、両軍に付随する、歩・砲両隊から総攻撃の銃砲が轟き渡り天地にこだまし壮烈なる最後の肉弾戦が煙幕濛々、砲煙弾雨の飛交う中に展開された。この時統監部から休戦ラッパが暁のしじまを破って鳴り渡り、壮観な歴史的演習も終りを告げた。

この日は、演習後閲兵分列式が行われ、宮脇県知事の令旨奉読、儀我歩兵第30連隊長の講評、小林高田連隊区司令官の祝辞、川合市長の祝辞、次いで知事の発声で陛下の万歳を三唱し、熊野学務部長の閉会の辞で大幕を閉じた。練兵場一帯は市民を初め近郷からの多数の参観者で稀有の賑わいであった。尚この演習で本校5年生丸山信郎君は、暗闇の中で誤って溝に転落し左手首骨折の重傷を負った。こういう実戦さながらの攻防戦では怪我人も少なからず出たであろう。

このようにして軍都高田を彩る勇壮な軍国絵巻は幾度となく繰り広げられてきたのであった。

◆戦後の入植者による開墾と食糧増産

戦況が不利に展開してくると兵隊を訓練する暇はなくなるし国民の食糧事情も窮迫してくる、昭和19年から県外産野菜類の移入が禁止され、高田市への野菜補給路は完全に切断されたため、市当局は空・荒地の開墾の徹底を強化させると共に中田ヶ原練兵場の一部約3万坪を借受け、各町内会に開墾自給策を講じさせた。しかし、実際開墾したのは広大な練兵場の一部約3万坪を借受け、各町内会に開墾自給策を講じさせた。しかし、実際開墾したのは広大な練兵場の1割にも満たなかったし、又町内会毎なぞという組織的な開墾でもなく、一部有志が片隅でほそぼそと鋤を打入れていたに過ぎなかったようである。

やがて終戦となり、高田市及び各市町村の兵事係（市町村により呼称が異なるかもしれぬ）や県都新潟に事務所のあった農地開発営団（入植の間では開拓営団と呼称、地元では今尚、中田原住民一かつての入植者一を開拓団と呼んでいる）の募集と指導に従い、復員軍人・引揚者・疎開者が入植し、10月頃から幹・根を掘起し大小の石を拾い、初の鋤を力強く打込んだ。ここ練兵場は終戦後国の方針に沿って、国に代り県の開拓課が管理していたと思われ

るが、ほぼ同じ頃（終戦時11月）復員軍人職業補導会では、復員軍人の入植を促進させるため20名余の農兵隊（当時の呼称）の出勤を求め、高田別院に宿泊させて測量に取りかかり開墾し始めた。しかし農兵隊は20年末までのわずかな期間であり、すでに入植していた人達約20名とは別々の地域で作業していたようである。

翌年春には入植者も40余名に増え、農地開発営団が米国製大型機械「ハロー号」1台を遣わし、約1年間ここに留まり入植者の先頭に立ち活躍する。

なにしろ過去40年間というもの、戦争という非生産的な戦闘行為の下請けをやってきただけに今更肥沃な農地に改造することは容易な術ではなく、入植者の人知れぬ苦労が続いた。彼らの熱意により21年秋には30町歩を開畑し、39人で仮分配するまでにこぎつけ、各自最も耕作し易い2、3反歩を取合った。22年12月には、ようやく全61町歩を開畑し38人が各自平均1町2、3反歩ずつ正式に所有することになった。

入植者は中田ヶ原婦農組合を結成、一致団結して開墾作業を始めたのであったが、苛酷な労働について行けず、最も多い時の40余名（10代～3、40代）も一人欠け二人欠けして、22年12月の中田ヶ原部落の完工式には38戸（その後更に転出が増え、昭和52年4月現在中田原地内62戸中開拓団は30戸になっている）になり、それまでは南新町旧兵舎に住んでいたが、9月には山屋敷地内に全戸完成して移住してきた。これまでに61町歩3反歩を開畑、これに要した労力およそ延べ3万人、経費80万円を注ぎこんでいる。全部畑にして、水田にしなかったのは用水が得られなかったからである（練兵場周辺には用水が流れているが、量的に不足し、又水を使用する権利が得られなかった）。

ここにはさつまいも、じゃがいも、菜種、大根、麦、大・小豆等の野菜を植えたが、労苦の割には収穫があがらなかった（因みに、22年秋の取入れは以下の通り一麦150石、さつまいも2万貫、じゃがいも3万貫、野菜5万貫、雑穀200石）。

◆長閑な農村風景から工場群学校地域へ

昭和25年頃には、農地解放で小作人が譲受けたとほぼ同額の、一反歩当たり五、六百円で買収し、中田原開拓農業協同組合を結成した。

同じ頃国からの融資を受け県開拓課の指導により、兎・鶏・羊・牛等の家畜を飼うようになった。初め黒牛（役牛）を10頭位入れたが、27年頃からは個人で農協から融資を受けて役牛を乳牛に代え酪農を試みる家も現れるようになった（昭和52年4月現在酪農専一は八戸、3頭～12頭を飼う）。この頃から30年頃にかけて国からの助成で、一戸あたり、石灰2トン位ずつ分配されてまいたり、畜産の堆肥を使うようになってから見違える程地味が豊かになってきた。30年前後3年間位、煙草を栽培したこともあった。

こうして、春秋に富む幾多の若人を兵士に育てあげ戦場へ送りこんだ、軍国主義の温床は長閑で平和な農村に大変貌をとげたのである。やがて金谷村が高田市に併合され、そして市の都市計画に沿って中田原頭が工場地域となり、30年代後半から有沢製作所・風間スキーKK、40年代に入ってから皆川製菓が建ち、最後に本校建築の槌音が砲弾に代って高らかにこだまするところとなった。

土地の売買は各工場・本校共、開拓団との間に市当局が中に入り、話を円滑に進めた。今ある建物の中では本校の敷地買収が最後だったが、開拓団では交換分合により売却代金

は各戸平等に分配できるようにした。

学校敷地の西側では前記野菜の外、葡萄・桃の果樹、そして酪農のための牧草栽培がかなりの比重を占めている。私達は教務室の窓から農事に勤しむ開拓団の人達の明るい顔を眺め、民主教育、平和教育の推進に情熱を燃しているところである。(本稿中、白戸栄之助・スミスの事は郷土史家池田嘉一氏のご教示により高田市史を、連合大演習・草競馬は地元紙高田日報を参考にした。練兵場の外郭・境界及び内部その他全般的に本校旧職員斉藤庄作氏、練兵場の戦後の開拓団の足跡については入植最古参の滝本重一郎氏のお話を参考にしてまとめた。記して感謝申し上げます)

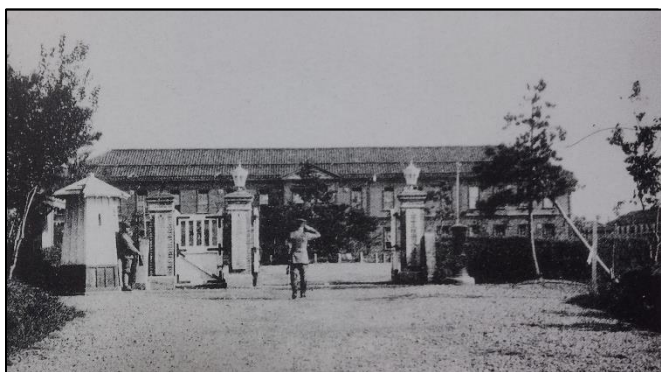
<陸軍第13師団について／編集部>

1906年(明治39年)、第13師団が常設師団として信越地方に設置される方針が明らかになると、高田市が積極的な誘致運動を行い衛戍地となった。高田、新発田、松本に歩兵連隊、小千谷に工兵大隊が配置され、高田には連隊区司令部、憲兵分隊、衛戍病院など師団の基幹部隊が配置された。また、高田市の周辺に中田原練兵場・灰塚射撃場・関山演習場が設定された。1908年(明治41年)11月6日、師団司令部は高田新庁舎に移転。1913年(大正2年)4月12日、師団司令部は満州遼陽に移転した。1915年(大正4年)6月3日、師団司令部は高田市に帰還した。

師団はその後朝鮮駐割を経て1920年(大正9年)のシベリア出兵に動員された。1923年(大正12年)の関東大震災には救援部隊として東京に出動し、警備任務に従事した。しかし、大正年間には続く戦役によって政府は財政難となっており、1925年(大正14年)に加藤高明内閣で行われた所謂「宇垣軍縮」によって4個師団の廃止が決まり、第13師団も第15・第17・第18師団と共に廃止された。

余談として、1910年より蒋介石が野戦砲兵(高田)として一時期、在籍していたことがある。また、長岡外史が第13師団長だった1911年(明治44年)1月12日、オーストリア＝ハンガリー帝国の軍人だったテオドール・エードラー・フォン・レルヒ少佐から、師団のスキー専修員にスキー技術を伝授された。(これが日本におけるスキー発祥と言われている。)

出典：Wikipedia



旧陸軍第13師団司令部(上越市高田城本丸内)



旧陸軍第13師団長官舎(上越市)